島津碧雲斎

近作書展

師　大島撫山　扇面

人生五十にして
功の無きを愧ず
花木春過ぎて
夏已(すで)に中ばなり
満室の蒼蠅(そうようはら)掃えども
去り難く
起きて禅榻を訪ね
清風に臥(が)せん

室町　細川頼之　海南江

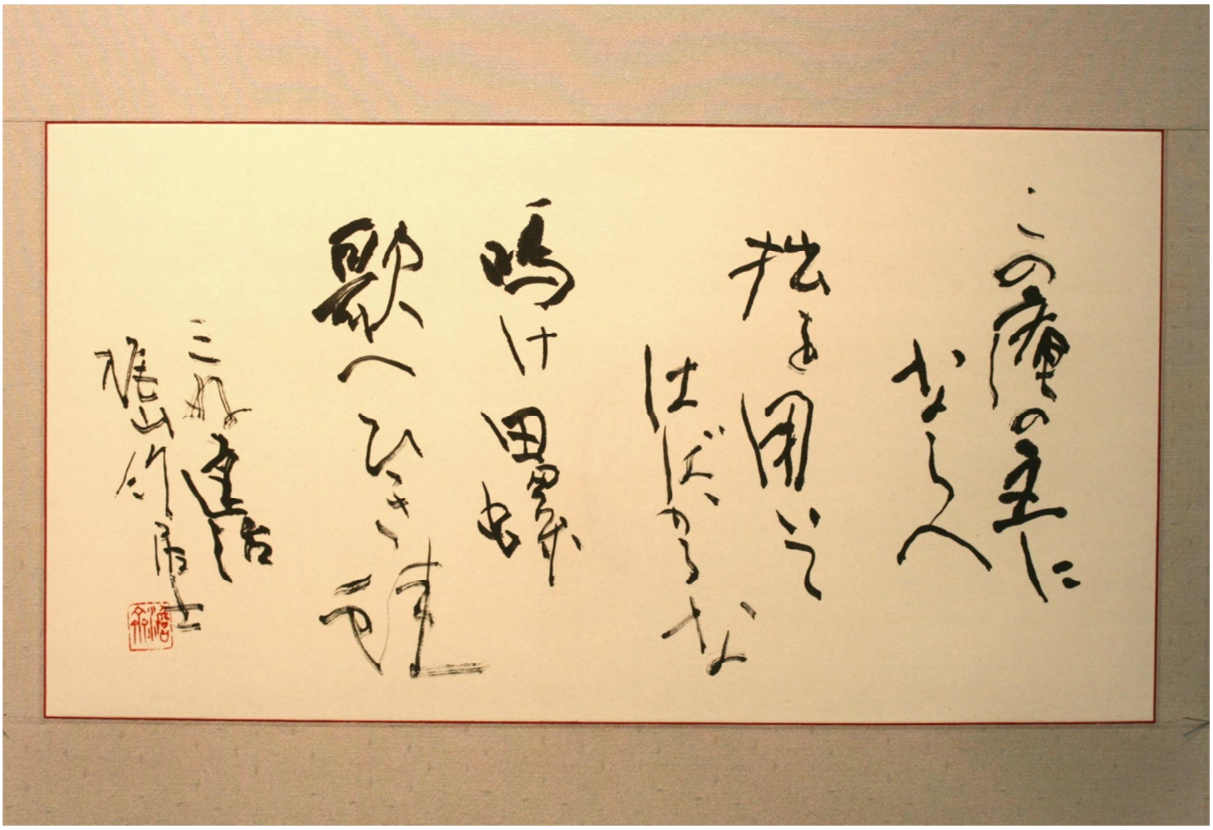
師　大島嵓山　扇面

居に良田広宅あらしめ山に背き
流れに臨み溝池環匝（かんそう） 竹木周布（うし）
場圃を前に築き果樹を後ろに樹う
舟車以て歩渉の難に代（か）うるに足り
使令（しれい）以て　四体の役に息（いこ）うに足る
親を養うに兼珍の膳有り
妻孥（さいど）苦身の労無し
良朋 萃（あつま）り止（いた）れば則ち酒肴（しゅこう）を陳（の）べて
以て之を娯（たの）しむ

漢仲長統　楽志論

裂古
破今

古を裂き
今を破る

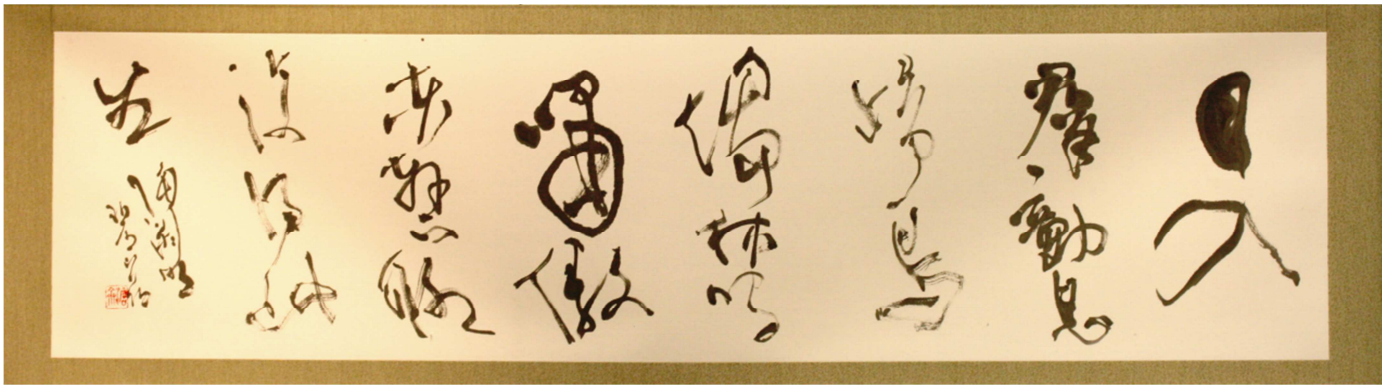


この庵の主にならへ
拙を用いてはばかるな
鳴け田螺
歌へひき蛙

三好 達治

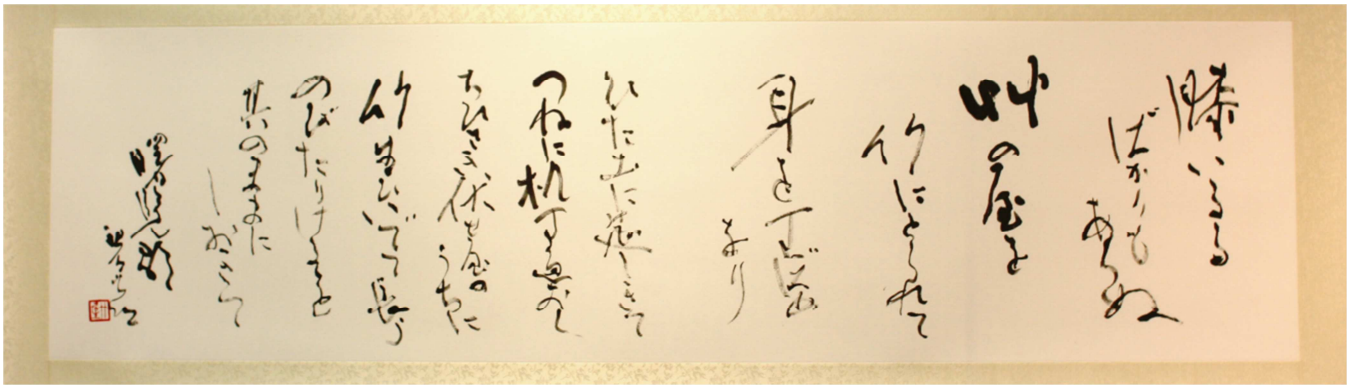
山僧が活計は茶三畝（さんぽ）　漁夫の生涯は竹一竿（いっかん）

高僧傳



日入(ひい)りて群動(ぐんどう)息(や)み
帰鳥林に趨(おもむ)きて鳴く
嘯傲(しょうごう)す東軒の下
聊(いさ)か復(ま)た
此の生を得たり

陶淵明



膝いるるばかりもあらぬ
艸の屋を竹にとられて
身をすぼめをり

ひた土に筵しきて
つねに机するおくちひさき
伏せ屋のうちに
竹生ひいでて長う
のびたりけるをそのままにしおきて

橘曙覧歌

透　関

関門を

透きとおること

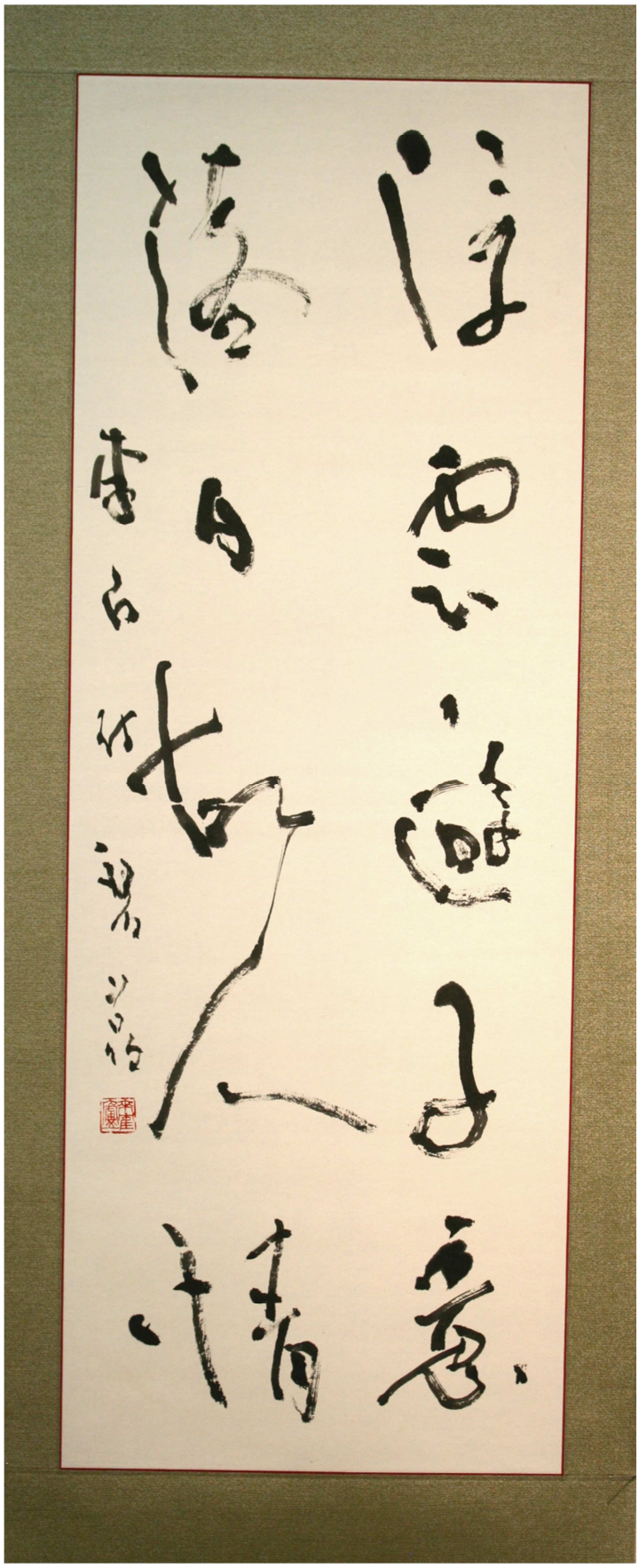
正法眼蔵

空（くう）　靈（れい）

澹（たん）　蕩（とう）

自然の只ならぬ気が
静かに澄んでほしいままに
漂い動いている様

芥川龍之介　秋山図



浮雲遊子の意（ふうんゆうし）　落日故人の情

李白　送友人